

チーム・ハバネロ　中間発表

～「死と生に関する教育」について～

青野、夏、小島、清水、富塚、宮本

●テーマ選定理由

アメリカをはじめとする諸外国では、死と生に関する教育が広く認識されている。（体系化されているところもある。）その導入背景には、人々の死に関わるこころの傷への問題意識、人工授精にまつわる議論、高齢化社会と死の外部化（病院での死の一般化）などの社会背景が挙げられるが、現在の日本においても、同様の問題が起きているといえるのではないだろうか。

しかしながら、日本におけるそのような取組みは、一般的ではないように思える。日本ではどのような取り組みがどのような意図のもと、どの程度行われているのだろうか。このような死と生に関わる教育を調査することを通して、日本の教育に対し何か示唆を得ることができるのではないかと考え、本テーマに着手するに至った。

\*海外における、死と生に関する教育の導入背景\*

◇台湾「生死教育」…自殺率の高まり、９・21大地震＋SARSによる大量死亡 ⇒ 需要高まる

◇アメリカ「デス・エデュケーション」…倫理問題の浮上（人口受精など）、ベトナム戦争

⇒ 大学の医療系学部の授業で導入されるように⇒義務教育段階でも、部分的に導入されている

●班のねらい・方向性

⇒死と生に関する教育の推進・改善

ねらい：①子どもの自尊心を高める⇒他者の尊重（いじめを減らす、などの効果）

　　　　②時代に要請された、生死に関する決定を行う力を養う

　　　　③子どもたちが、老い、病、死と向き合えるようにする⇒心のケアの役割

②以外は死と生に関する教育でなくとも促進できるかもしれない。

しかし、これらをすべて総合して扱うことができるのは、死と生に関する教育以外にないのではないか。

●テーマ概要

キーワード：「死の教育」「いのちの教育」「生命倫理教育」「死生観教育」「死の準備教育」・・・など

どれか一つの概念にフォーカスしたわけではないが、今のところ幅広く調査中。

生（いのち）に関する教育か、死に関する教育に絞るか、話し合ったが、その内容を検討しつつ、どちらも調査していくこととした。（内容がかぶるところも。表裏一体であるともいえ、安易にはわけられないのではないかと考えた）

定義：まだしぼっていないが、たとえば「死の準備教育（Death　Education）」は、「自分に与えられた死までの時間をどう生きるか考えるための教育」。よりよく生きるための、『生への準備教育』とも言える。

日本での現状（大谷、2004）概念上、以下の２タイプに分けられる。

生命倫理教育

公民、倫理、現代社会といった科目のなかで、生命倫理における重要な論点（自己決定権やインフォームド・コンセント、安楽死、尊厳死など）について考えさせるタイプの教育。

いのちの教育

総合的な学習などの文脈で注目されてきた「生命の重さ」や、自然に対する尊敬や畏れについて学ぶことを目的とするタイプの教育

＜問題点など＞

・死と生に関する教育が大切だと考えている教師は多いが、なかなか実践できていない。

⇒道徳の時間、総合的な学習の時間、など学校活動全体を通じて行われているが、学習指導要綱に記載があるわけではないので、まとまった時間での学習時間の確保・体系的な取り組みが難しい。

・死を教えることは容易ではない。また、死は学校で教えられるべきものではない、という意見もある。

・教師が指導内容や教材開発を行うための時間・情報などが少なく、教師によって取組内容に差あり。

・日本における「生命倫理教育」は、多くの場合、生徒にディスカッションをさせ、「正解はない」と丸投げする。ただの「知的遊戯」になってしまっている場合がある。

・日本における「いのちの教育」は、体験や感性に過度に偏重していることによって、それらが孕む政治性を隠蔽しているという指摘がある。

・「いのちの教育」が叫ばれる背景には、「子どもの凶悪化」というストーリーが存在するが、それらの信憑性が不明。

・生と死を巡る問題はつねに政策と関わるものであり続ける。政治と無関係である、という規定がすでに政治的であるのに、そこについては無自覚的である。

●今後の予定

・上にあげた問題点の中から、フォーカスすべき問題を絞る。

・比較国を絞る。

（いまのところ日本の生命倫理教育・いのちの教育と、アメリカのデス・エデュケーションを比較していく予定ですが、未定。台湾の「生死教育」との比較になる可能性もあります）